

会場での質疑応答の記録

北中学校区

Q 1 :	小中一貫校にどんなメリットがあるのか。
A 1 :	これまでの小中学校では、それぞれの学校でこんな子どもに育てたいという目標を掲げて子ども達を育ててきた。小学校と中学校で方向性がないことがあった。一貫教育には3つのポイントがあるとされていて、1つ目は、目標を一貫して持つことで9年間を通して子ども達を育てることが出来る。2つ目は、学習内容の系統性で、小学校で学んできたことと重なることを中学校で学んでしまうということがあるが、小学校で学んだことを生かして中学校でこういうふうに学ぶという小中一貫カリキュラムを掛川市では令和2年度の末に策定している。1点目と2点目だけでは、分離型の学校でも一貫教育は可能であるが、大事なのは3点目の指導方法の継続性であり、具体的に子ども達をどう指導していくのかということについては小中学校で緊密にすり合わせをしながら子ども達への対応をしないと効果は薄くなってしまう。そのためには、小学校と中学校の先生が常に情報交換をしている、あるいは、実際に小学生の様子を見る、中学生の様子を見る、ということが必要になってくる。3つのポイントを兼ね備えることで小中一貫のメリットが生かされ、効果的な教育活動が展開できるようになる。
Q 2 :	一貫校になって授業はどうなるのか。
A 2 :	小学校は小学校の授業を行い、中学校は中学校の授業を行う。それは、その学年に必要な内容は小学校と中学校で全然違うため。小学生と中学生の交流は常に行うのではなく、時折交流をすることになる。英語の授業で言えば、買い物の英会話を小中学校それぞれで学ぶ。勉強の深みは小中学生で全然違うが、小中学生が一緒になって中学生がお店屋さん、小学生がお客さん役になって英会話をしてみるというような授業は市内で実践したことがある。それぞれの勉強した内容を生かした交流をするということはよく見られると思う。
Q 3 :	単学級はダメなのか。
A 3 :	必ずしも単学級が悪いのではなく、メリット、デメリットの両面がある。単学級でのデメリットの深刻なものとして、人間関係が崩れてしまった場合、友人関係でトラブルが起きた場合、クラス替えができればクラスを離したりする配慮ができるが、それができないと、人間関係に悩んでしまうということがある。これは誰にでも起こるということではなくて、そういう子も出てきてしまうということがある。 今、求められている教育の中で、いろいろな仲間の価値観に触れて自分の世界を広げていくということが必要な中で、単学級の中の固定された人間関係の中でずっと育っていると自分の立ち位置、ポジションが固定しがちになるという話も聞く。いろいろな人と触れ合って自分の殻を破ってほしいと思う。仲の良い集団であれば大人になってからもずっと続く関係のようなメリットもあるので、絶対ダメということではないが、トラブルになってしまった場合にはかなり苦しいというのは子どもの様子を見て感じることもある。

Q 4 :	再編の目的は何か。磐田市は英会話と聞いているが。
A 4 :	掛川市では、変化の激しい社会に適応できる子どもを育てる。特定の教科というよりは人間力の育成を行っていく。 掛川市では、3つの創る力、創像力、創合力、創律力を柱にして小中学校を通して子どもを育てようとしている。各学校で教員が共通理解している内容になる。詳しく市のHPに掲載しているのでご覧いただきたい。
Q 5 :	適正規模とはどのくらいの規模なのか。
A 5 :	文部科学省が作成した中央教育審議会での資料と公立小学校、中学校の適正規模・適正配置の手引きという文書に記載に、大規模校小規模校のメリット、デメリットと適正規模について記載されている。小学校については1学年、2～3学級、中学校は4～6学級となっている。国が基準として示している。
Q 6 :	学校の大きさはどのように決まるのか。
A 6 :	学級数によって決まってくる。
Q 7 :	小中一貫校の場所はどこになるのか、3パターンとも実現は可能なのか、予算はあるのか。
A 7 :	市として一番進めていきたいのは、小中一貫教育の効果が一番高い小中一体校である。学校は子どもの学びの場であると同時に、地域のコミュニティの場でもあったり、多機能な部分があるため、本当に一か所にまとめてしまってよいのかということをお皆さんから御意見として伺いたいと思っている。そういうことを加味した中でどこに作ろうかという話になってくると思う。予算については、北中の校舎が新しいこと、敷地が比較的広いことから、できればそこを活用してというのが一番の候補かと考えているが、学区が広いので、本当にそこでよいのかということを含めて地域の御意見を伺いたいと思っている。
Q 8 :	地区から学習センターがなくなってしまうと地域の交流がなくなるのではないか。
A 8 :	新しく作る学校については当然そう言った機能を持たせることを考えなくてはいけない。これまでの学校は学校教育としての利用しか想定していなかったが、これからは、地域の皆さんの活動の場所、学校が使う場所、中間に共用スペースを設けることで、これまでの地域生涯学習センターと比較して広いスペースが使えるようになる。施設の管理もすみ分けができるようなことを考えながら作っていかないといけない。どんな施設を作っていくかは、北中学区の再編に着手する時に、このようなワークショップを開催して検討を行っていききたい。具体的にどんな施設を作るかという段階で子どもたちの意見をもらいたいと考えている。
Q 9 :	今後のスケジュールはどうなるのか。
A 9 :	今中学校区単位でお話をさせていただいているが、現在の学区でよいのかということも皆さんと考えていく必要があると考えている。地域のコミュニティを考えると、恐らく現在の形の中で検討していくのがよいのではないかと考えるのではないかと考えている。9中学校区をすべて同時に進めることはできないため、優先順位、施設の老朽化度や子どもの数の増減、地域の意向等を総合的に勘案して順番を決めて、一つずつ対応していきたいと考えている。
Q10 :	先生のモチベーションはどう変わるか。
A10 :	実際に再編してみないと分からない部分であるが、掛川市に勤務している教員は熱心に子ども達に向き合う教員が多いので、安心していただいて大丈夫だと思う。

Q11.:	人口増の施策について。
A11.:	子どもの数が増えればこうした話をする必要がないのではということは他の地区からもいただいている。少子化対策についてはいろいろな取組をしている。働く場の確保、企業誘致もそうだし、子育て施策で待機児童解消に向けた施設整備を進めてきた。また移住についても掛川市は他と比べると若干多い。婚活の支援等いろいろやらせていただいている。 ただ、現状を見ていると増えるところまでいくのはなかなか難しいのではないかと考えている。掛川市の出生率は、1.64。子育て施策が進んでいると言われている兵庫県の明石市は1.70でほとんど変わらない。1.7とか1.6では子どもの数は増えない。2.0でも増えない。親になる世代の人達の人数が減っているため。少子化対策はやらなくてはいけないが、増えるというところまで行くのは相当難しい。減るスピードを緩やかにすることは頑張れば可能であると思っている。そういうことはやっていきたいと考えている。